

〔提 言〕

家族看護学への関心のひろがり

岩手県立大学看護学部

兼 松 百合子

従来、看護は患者の病気とその治療に直結することに重点が置かれ、家族は患者の療養に協力することが当然とされた。しかし、家族の一人に病気が発生すると、その影響は他の家族に及び、その心身の負担は入院中も退院後の在宅療養においても大きく、患者とともに家族もまた大きな援助を必要としていることが明らかになった。そして、近年の家族社会学の研究成果を取り入れ、家族ダイナミックスの視点から家族機能を高めることが母子看護、精神看護、老人看護等、患者のケアに家族の関わりが不可欠な分野において強く認識されて来た。このような考え方は、看護が「健康・不健康を問わず、すべての個人、家族、地域社会を対象とする」という看護の概念規定によっても支持され、予防的看護においても家族を含めた進め方が効果的であることを示している。

一方、近年急激に高まっている訪問看護や在宅ケアのニーズが、家族看護学への関心を高めていることも否定できない。独居者が増え、サポートシステムを構築する必要性が強調される中、同居家族でも患者と家族のコミュニケーションがとれない家族も増えている。このような時、患者へのケアを確保するためには、本人と家族の希望を十分聞いた後、必要に応じて看護者やヘルパー等による直接ケアを準備しながら、家族の参加を促していくなど、家族とともに歩む姿勢が求められるであろう。そのためには、直接ケ

アの技術の他に、家族のダイナミックな機能を高める技術や連絡・調整等の能力を必要とする。

しかし、わが国の看護教育においては、家族へのアプローチの方法はあまり教えられておらず、卒業後の実践の中で、患者本人へのケアはできても家族との接触を敬遠する者もいる。患者とは親しく話していても、見舞いに来た家族には目もくれない看護婦も稀ではない。これは看護基礎教育の課程において、家族を患者の背景として捉え、患者へのよき協力者となるように指導することを強調しており、援助を必要とする対象としてのとらえかたが余りよく教えられていないためと思われる。今後改善が望まれるところである。

また、看護に関する学会には、近年、家族についての研究が数多く発表されている。小児看護に関する学会においても発表の半数以上が、父母やきょうだい等への影響や援助に関するものである。そこで、それらは小児看護学研究なのか家族看護学研究なのかという疑問も出てくるが、筆者は、患者の問題が家族員に及ぼす影響や相互作用の変化等、家族の課題を中心にしたものか、疾患や発達課題等小児の特徴を中心にしたものかにより発表者が学会を選んでいると思う。いずれにしても家族看護学への関心の広がりにより、多くの研究がなされ看護学の発展に寄与していると思われる。